

いま 現在、あらためて《人文学》を問う

安 酸 敏 眞

Making a New Inquiry into the “Humanities”

Toshimasa YASUKATA

Abstract

The “humanities” exist at the intersection of scholarly and cultural learning, and usually include the study of languages, literature, history, and philosophy. However, this traditional field is now at a crossroads. Some argue that the era of humanist education, which previously educated youths by the reading of classical or culturally important books, has come to an end. In fact, it has been declared that humanities and the celebrated ideal of *humanitas* have finished playing an important role. Others boldly advocate a turn to “digital humanities”, a field that takes advantage of the advances found in digital technology. Thus, the question of the humanities as a field is currently a fascinating topic.

Within the context of these discussions, I consider the issues at stake, in order to prescribe a method through which the humanities could regain their strength and relevance. In addition, since we are living in an age of globalization, I advocate breaching the barrier between the East and the West within the humanities. Although admittedly not erudite throughout the entire range of this scholarly field, I nonetheless re-conceive it in a new and creative fashion. I therefore refer to Boeckh’s formula of “the knowledge of what is known” (*die Erkenntnis des Erkannten*), as well as to Ernst Cassirer’s original view of the human being.

In contrast to the natural sciences, the humanities inquire into each cultural phenomenon related to human beings. They strive to understand what the human spirit has produced, and to attain that knowledge. Therefore, the humanities are concerned with a self-referential understanding/knowledge of what is known. These activities, however, are based upon the definition of human beings as “ζῶον λόγον ἔχον,” a definition that Cassirer paraphrased as the novel idea of “animal symbolicum.” Hence, one can characterize the humanities as human beings’ self-reflexive and interpretive efforts to understand themselves and their own cultures.

はじめに

筆者はキリスト教学 (Christian Studies) の専門家であって、《人文学》に関してはディレクターにすぎない。しかし学部長時代に人文学部のカリキュラム改革を主導した関係上、新たに設けた必修科目 (「人文学概論」) の講義を担当せざるを得なくなり、そのため急遽『人文学概論—新しい人文学の地平を求めて』(知泉書館、2014年)を書き下ろした。この小著は、本来、自分の授業のための教科書

を意図したものであったが、類書がないこともあってか、幅広い読者の間に意外な反響を呼ぶことになった。今回のシンポジウムへのお招きも、自分にとって予想外の出来事であった。以上のような次第で、《人文学》の専門家というわけではないが、ささやかな学究の歩みを踏まえて、若干の問題提起を試みたい。

わが国における人文学および人文学部の現状

最初に、わが国における人文学部の歴史と状況に

ついて、ざっと概観しておこう。現在、わが国は合計 50 の大学に「人文学部」が存在する（国立 10 校、公立 1 校、私立 39 校）が、戦前には「人文学部」は一つも存在しなかった。全国で一番古くから「人文学部」をもつ大学は——この点については、拙著に不備が見られる！——新潟大学で、学制改革に伴って 1949 年に設置された新制大学のなかに、最初から「人文学部」を置き、今日に至っている。1949 年にはもう一校、東京都立大学のなかに「人文学部」が設立されたが、残念ながら「首都大学東京」への移行によって、2011 年 3 月末をもってこの学部は半永久的に姿を消してしまった⁽¹⁾。「人文学部」を擁する私立大学はすべて戦後にできた比較的新しい大学ばかりで、しかも人文学部が開設されるのは、ほぼ 80 年代後半から 2000 年代にかけてのことである。他方、早稲田・慶応・上智はもとより、MARCH と称される明治・青山・立教・中央などの老舗の有名私立大学にも、あるのはみな「文学部」である（資料 1）。

（資料 1）人文学部を持つ日本の大学

国公立（国立 10 校、公立 1 校）

- 弘前大学 1965 ● 新潟大学 1949 ● 信州大学 1966
- 山形大学 1967 ● 静岡大学 1965 ● 山口大学 1978
- 茨城大学 1967 ● 三重大学 1983 ● 宮崎公立大学 1993
- 高知大学 1977 ● 富山大学 1977

私立（41 校、廃止校を除くと 39 校）

<北海道・東北>

- 札幌学院大学 1977 ● 札幌国際大学 2003
- 北海学園大学 1993 ● いわき明星大学 1987

<関東>

- 恵泉女学園大学 1988? ● 敬和学園大学 1991
- 駒沢女子大学 1993 ● 城西国際大学 1992
- 聖学院大学 1992 ● 聖徳大学 1990
- 東京家政大学 2009 ● 東京家政学院大学 1988
- 東京成徳大学 1993 ● 東洋学園大学 1992
- 新潟産業大学 1994 ● 武蔵大学 1969
- 明星大学 1965 ● 目白大学 1994
- 和洋女子大学 1998

<中部>

- 愛知文教大学 2010 ● 桜花学園大学 1998
- 至学館大学 1995（2013 廃止）● 中部大学 1998
- 東海学園大学 2000 ● 南山大学 2000

<近畿>

- 京都精華大学 1989 ● 神戸学院大学 1990
- 神戸山手大学 1999 ● 聖和大学 1995（2013 廃止）
- 相愛大学 1984 ● 帝塚山大学 1999

<中国・四国・九州>

- 広島修道大学 1973 ● 松山大学 1974
- 松山東雲女子大学 1992 ● 九州ルーテル学院大学 1997
- 西南女学院大学 2001 ● 長崎純心大学 1994
- 福岡大学 1969 ● 福岡女学院大学 1990
- 沖縄大学 1999 ● 沖縄キリスト教学院大学 2004

北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州のいわゆる旧帝大にあったのもすべて「文学部」であり、現在も上記の大学では学部名称は「文学部」のみであるが、1990 年代以降の文部科学省の諸政策（e.g. 大学院重点化政策）に対応して、こうした大学においても大きな変化が生じている。例えば、筆者の出身母胎である京都大学文学部では、哲・史・文という従来の 3 学科に加えて、1992 年に「文化行動学科」なる第 4 学科が新設されたが、3 年後の 1995 年にはさらに大講座化が実施され、いまや文学部は「人文学科」という 1 学科のなかに、5 専攻（「文献文化学」（東洋系・西洋系）、「思想文化学」、「歴史文化学」、「行動文化学」、「現代文化学」）16 大講座が存在する体制へと改組されている。

ここで注目すべきは、哲学・歴史学・文学・文化行動学を含む全体が「人文学科」と呼ばれていることである（大阪大学も同様に、現在は「人文学科」1 学科に移行している）。ちなみに、大学院の名称は、北海道大学、東北大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学とも「文学研究科」のみであるが、東京大学では「人文社会系研究科」、九州大学では「人文科学院」となっており、英語表記はそれぞれ Graduate School of Humanities and Sociology、Graduate School of Humanities である。このように、「人文学」とか Humanities という名称が近年人口に膾炙しているが、この名称の中身についてどの程度掘り下げた分析がなされているのだろうか。拙著を執筆する際に、参照した書物は次の 7 冊である（資料 2）。

（資料 2）人文学に関する書物 1

赤坂行雄『人文的「教養」とは何か—複雑系時代の人文学』

學藝書林、1998年
赤坂行雄『人文学のプロレゴメナ』風媒社、2000年
南川高志編『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房、2007年
服部良久・南川高志・小山哲・金澤周作編『人文学への接近法—西洋史を学ぶ』京都大学学術出版会、2010年
広島大学大学院文学研究科編『改訂版 人文学へのいざない』広島大学出版会、2013年
エドワード・W・サイード、村山敏勝・三宅敦子訳『人文学と批評の使命—デモクラシーのために』岩波現代文庫、2013年
西山雄二編『人文学と制度』未来社、2013年

しかし CiNii であらためて検索してみると、それ以外にも下記のものがある（資料3）。

（資料3）人文学に関する書物2
山田慶兒・阪上孝編『人文学のアナトミー—現代日本における学問の可能性』岩波書店、1995年
舟川一彦『十九世紀オクスフォード—人文学の宿命』信山社、1999年
共生倫理研究会編『共生の人文学—グローバル時代と多様な文化』昭和堂、2008年
齋藤晃編『テキストと人文学—知の土台を解剖する』人文書院、2009年
栗原隆編『人文学の生まれるところ』東北大学出版会、2009年
大阪大学グローバル COE プログラム編『コンフリクトの人文学』大阪大学出版会、2009年
愛媛大学法文学部・新潟大学人文学部編『人文学の現在（いま）』創風社出版、2012年
マーサ・C・タスバウム、小沢自然・小野正嗣訳『経済成長がすべてか？—デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013年
漢字文献情報処理研究会編『人文学と著作権問題』好文出版、2014年
西山雄二編『カタストロフィと人文学』勁草書房、2014年

「人文」とか「人文科学」という名称に拡大すれば、その数はさらに増える。例えば、筆者の書架にあるものに限定しても、以下のタイトルを挙げることができる（資料4）。

（資料4）人文科学および人文書に関する書物の一例

淡野安太郎編『人文科学の名著』毎日新聞社、1971年
E・カッシーラー、中村正雄訳『人文科学の論理』創文社、1975年
人文会20周年記念委員会編『人文科学の現在—人文書の潮流と基本文献』人文会、1988年
人文会25周年記念委員会編『人文書のすすめ』人文会、1993年
唐沢かおり・林徹編『人文知1—一心と言葉の迷宮』東京大学出版会、2014年
秋山聰・野崎歆編『人文知2—死者との対話』東京大学出版会、2014年
熊野純彦・佐藤健二編『人文知3—境界と交流』東京大学出版会、2014年

これらすべてに目を通してはいるわけではないので、ハッキリしたことはいえないが、近年「人文学」を再検証する動きはかなり顕著である。しかし筆者の印象では、「人文学」と「人文科学」は一般にあまり区別されていない。実際、『広辞苑』第6版の説明では、「人文科学」に humanities という英語が充てられており、「人文科学」と「人文学」が同義であると見なされている。しかしはたしてそうだろうか。筆者自身は、両者は密接な関係にあるものの、やはり区別されるべきだと考える。一言でいえば、「人文学」は本来的には learning であり、「人文科学」は文字通り science である⁽²⁾。この二つを安易に同一視してしまうところに、「人文学」をめぐる議論の混乱の一因があるように思う。いずれにせよ、「人文学」の概念については、一度これを概念的にしっかりと洗い直す作業が必要である。

「人文学の終焉」？

ところで、筆者は拙著『人文学概論』の議論を、「『人文学の終焉』からのスタート」という少々どぎつい章題のもとに、ペーター・スローターダイクの問題提起から始めた。スローターダイクは『「人間園」の規則—ハイデッガーの『ヒューマニズム書簡』に対する返書』という書物において、人文主義への死亡宣告を行っているからである。彼によれば、「人文主義の本質と機能」は、「書物（エクリチュール）」という媒体（メディア）を通じて友愛を生み出す遠隔情報伝達（テレコミュニケーション）」にある。人文主義は若者たちに古典作家の書物を押しつけ、現代とは時代を隔てた過去のテキストの読解を通じ

て、野獣性をもった人間を飼い馴らし、このような教養＝人間形成のプロセスを通して、「人間を野蠻から奪い返そうとする運動」を意味してきた。しかしこのような「国民＝市民的な人文主義の時代は終焉した」というのである⁽³⁾。このような「人文主義の終焉」が遂には「人文学の終焉」を招くことは、ほとんど自然のなりゆきであろう。

しかしスローターダイクを持ち出すまでもなく、人文学が今日岐路に立っていることは、それに従事しているほぼ全員が痛感しているところである。それを端的に示している最新の事例は、本年8月4日に打ち出された「『国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点』について（案）」という文書である。そこにおいて国立大学法人評価委員会は、「ミッションの再定義」を踏まえた速やかな組織改革の必要性を訴え、「教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割などを踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的にとりくむべきではないか」と提言している。そこには「効率化」「実用性」「グローバル化」を旗印にした文科省主導の大学改革が、大学と学問についていったいどのような将来像を描いているかが透けて見える。まるで人文学などは私立大学に任せておけばよいといった雰囲気である。経済的合理性と国際競争力の追求を至上命題にして、人間形成に資する人文学的学問や基礎研究を蔑ろにする、実に浅薄な考えであると言わざるを得ない。いずれにせよ、人文学はいまやすっかり窓際に追いやられ、国庫の財政事情次第では「なくてもよい学問」になろうとしている。

ヨーロッパの学問史に目を転じると、ルネサンス期の「フマニタス研究」(studia humanitatis)⁽⁴⁾に由来する伝統的な人文学は、古典文献の講読と注解を通じた、人間性の普遍的な涵養を目的としていたが、19世紀以降、近代知のパラダイム変換に伴い、やがて自然科学と社会科学がそこから独立していくことによって、人文学はいわば「残余の学問」となり、ついには自然科学と社会科学をモデルとして、実証的な「人文科学」として自己変革するしか延命できなくなったのである。その意味で、「人文学の死と人文科学の誕生」⁽⁵⁾という西山雄二氏の表現は、言い得て妙である。

ヘーゲルの時代には、まだ人文科学・社会科学・自然科学の分化は見られず、むしろ哲学がすべての学問の基礎にあるものとして、知の統合的機能を果たしていたが⁽⁶⁾、「ヘーゲルの死とともに、哲学が諸学問という宇宙のなかで自ら指導的役割を果たすのだと信じていた時代は終わりを告げた」⁽⁷⁾のである。19世紀の30年代以降、実証的自然科学の長足の進歩と、それに呼応するかのようには発展を遂げた社会科学の台頭によって、いわゆる人文学は守勢に立った退却戦を余儀なくされる。ディルタイの「精神科学」の議論も、リッカートの「文化科学」の議論も、所詮は自然科学の学問性を大前提にした、補完的な対抗モデルの模索にすぎない、と言えなくもない。それゆえ、人文科学の将来的可能性は、むしろ科学として自己を再編成する際に投げ捨てた、人文学の原点たるフマニタス＝人間形成の理想をいま一度検証し、新たな仕方でも「人文科学の論理」⁽⁸⁾を構想することにあるのではないか。

「デジタル人文学のすすめ」？

しかし「人文科学」全般にまで話を広げると、かなり厄介なことになるし、「人文学」と「人文科学」の関係についても、専門的な概念史的・学問史的研究が必要になるので、以下においては、「人文科学」とは区別された、本来の意味での「人文学」に議論を限定することにしたい。すでに述べたように、現今、人文学の苦境や危機があちこちで囁かれているが、その一方で新しいタイプの人文学を果敢に模索する動きもみられる。それが「デジタル人文学」ないし「デジタル・ヒューマニティーズ」と呼ばれるものである。

「デジタル人文学」(Digital Humanities)という言葉は、いまから約10年前にアメリカで生み出され、いまやそれは全米人文学基金をはじめとする様々な研究助成団体から巨額の資金が投じられる研究領域にまで成長している。わが国にも「日本デジタル・ヒューマニティーズ学会」(Japanese Association for Digital Humanities)なる学会組織が結成されているようで、それは狭いアカデミズムの枠を超えて人文的学知の成果を広く市民に提供する可能性を模索している。この学会活動と関連しているかどうか定かではないが、「デジタル人文学」を表題に据えた書物も出始めている(資料5)。

(資料5)「デジタル人文学」に関する書物

ルー・バーナード、キャサリン・オブライエン・オキーフ、
ジョン・アンズワース、明星聖子・神崎正英監訳『人文
学と電子編集—デジタル・アーカイブの理論と実践』慶
應義塾大学出版会、2011年

楊曉捷・小松和彦・荒木浩編『デジタル人文学のすすめ』
勉誠出版、2013年

小野俊太郎『デジタル人文学—検索から思考へとむかうた
めに』松柏社、2013年

最初に挙げた本の帯には、「人文学の未来を考える——デジタル技術と人文学との出会いは、いったい何をもたらしたのか——われわれはいま何を考え、どのように行動すべきなのか——」と記されており、そこにはデジタル技術を積極的に活用しながら人文学の新しい可能性を追求する姿勢が窺える。筆者はこの方面にはまったく暗く、「デジタル人文学」を論評する資格をもたないが、自分なりの危惧の念については、拙著に簡単に示しておいた⁽⁹⁾。要点を述べれば、人文学は「人間とその文化を総合的に探究する学問」であるのみならず、フマニタス＝人間形成に資する学問でもある以上、どんなに優れた処理能力をもつデジタル機器が利用できるようになったとしても、その担い手はあくまでも人間でなければならない。そしてデジタル的な機器や情報は、アナログ的な人間知や判断との協働によってはじめてその価値を発揮するものだ、ということである。

筆者としては、「デジタル人文学」の主唱者たちのように、人文学の新しい可能性をデジタル技術との結合の方向に求めるのではなく、むしろ人文学をその本質に即して、その「源泉へ」(ad fontes)と遡源しつつ問い直し、思想的かつ文献学＝解釈学的な作業を通じて、人文学の新しい可能性を探ってみたい。これは自分自身がこのような仕方で行って来て、それなりの手ごたえを感じているからである。これは一種の温故知新的な試みにほかならないが、温故知新とは「煮つめてとっておいたスープを、もう一度あたたためて飲むように、過去の伝統を、もう一度考えなおして新しい意味を知る」⁽¹⁰⁾ことである。「フマニタス研究」としての人文学は、ルネサンス期にその十全な基礎が確立されたが、「ルネサンス」(Renaissance)とは rebirth つまり「再生」の意味であり、したがってこれは一種のリ

バイバル運動である。そうしたリバイバル運動のなかで胚胎・成長した人文学の精神は、まさに東洋でいう「温故知新」のそれに合致する。筆者なりの人文学の捉え方は、実はそういう「温故知新」の精神に触発され、具体的な思想史的かつ文献学＝解釈学的な作業を通じて、ある相貌をもつものとして獲得されたものである。

ベークの「認識されたものの認識」

冒頭で述べたように、筆者はキリスト教学の研究者であり、トレルチ研究 (*Ernst Troeltsch: Systematic Theologian of Radical Historicity*. Scholars Press, 1986) でヴァンダービルト大学から、レッシング研究 (『レッシングとドイツ啓蒙』創文社、1998年) で京都大学から学位を得たが、いずれの研究も膨大な量のドイツ語文献を、ただひたすら読んで解釈するという作業の積み重ねであった。一次文献を読み進めながら、二次文献にあたってそれぞれの解釈の是非を問い、またテキストの思想内容を時代的コンテクストのなかに位置づけながら、両者の相関関係について思考するという、きわめて単純な作業の繰り返しなのだが、やがてそのなかから独自の理解が生まれ、一つの像として結実してくる。これは人文学に従事する研究者が誰でも経験するところであるが、そこには文献学とか解釈学として整序されてくる要素が多く含まれている。テキストの精読、読解、解釈、あるいは翻訳といった作業は、誰もがやっている平凡な仕事である。しかし筆者は、アウグスト・ベーク (August Boeckh, 1785-1867) の『文献学的諸学問のエンツィクロペディーと方法論』*Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* (1877, 1886²) との出会いを通して、人文学の諸作法に目を見開かされた⁽¹¹⁾。ベークを読み始めた動機は、日本思想史家の村岡典嗣が方法論的に決定的な影響を受けた人物だからであるが⁽¹²⁾、この著作を読み進むにつれて目から鱗が落ちる体験を何度もした。古典文献学のバイブルの如く見なされてきた書物だけに、トレルチ研究やレッシング研究において深い自覚もなく実践してきた各種の作法が、系統だった仕方で行われており、頷くことしばしばであった。

ベークの書物を通じて、古典文献学だけでなく、人文学そのものの精髓にも触れた思いがするが、ベークは文献学すなわちフィロロギーの本来の任務

を、「人間精神から産出されたもの、すなわち、認識されたものを認識すること」(das Erkennen des vom menschlichen Geist Producirten, d.h. des Erkannten) (13) として捉えている。筆者は西洋古典学の門外漢なので、ベークの書物を翻訳するにはかなりの困難が伴ったが、しかしこの作業を通じて、人文学とはいかなる学問であるかがわかったように思う。ガレンは名著『ルネサンスの教育』のなかで、人文学的意味における「研究するとは、読み註釈すること」であり、「知識習得の過程とは註釈であり、あるいは註釈への註釈である」(14) と語っている。われわれは人文学研究において、先行研究とか研究史を洗い直しつつ、研究対象となっているテキストや、そのテキストから読み取るべき思想を、つねに新たに解釈し直し、おのれの理解へもたらそうと努める。それは「註釈への註釈」を通じて、ベークのいう「認識されたものの認識」(Erkenntniss des Erkannten) (15) に至ろうとする努力にほかならない。

新しい人文学への手がかかり

それでは、ベークのこの著作から人文学の営みにとって、どのような示唆が与えられるのであろうか。実は、拙著『人文学概論』は、ベークの「認識されたものの認識」に触発されて構想されたもので、わかる人にはわかるはずであるが、ベーク的精神は随所に見出される。いずれにせよ、ベークの著作との出会いなくしては、この本は書けなかったと断言できる。言い方を変えると、ベークの『文献学的諸学問のエンツィクロペディーと方法論』の序論と第一主要部を訳出した副産物が、その直後に出た『人文学概論』だということである。

ところで、この秋に東京大学文学部の教員たちによる『人文知』全3巻が刊行されたが、この労作は筆者の思い描く人文学とはいささか異なっている。かつてヘーゲルは文献学を「知識の寄せ集め」(Aggregat von Kenntnissen) だと揶揄したが、ベークはこの批判に応じて、文献学を一つの学問体系として呈示した(16)。同じように、人文学も一つの秩序と連関をもった知的宇宙でなければならない。もちろん、学問の専門化が極度に進んだ現在では、このような全体知は実際問題としては不可能であろう。しかし人文学がいわゆる人文科学ではなく、studia humanitatis という意味での人文学であろう

とするのであれば、専門的知識を寄せ集めただけでは十分ではない。統合的原理として人間性の理念を中心に据え、人間とその文化を総合的な視点のもとに探究するということがなくてはならない。しかし問題は、統合的原理として機能してきたフマニタス＝人間形成の理念が、今日厳しい批判に晒されており、容易にこれを掲げることができないことであろう(17)。

管見によれば、人文知はスキエンティア (scientia) すなわち科学ではなく、フマニタス＝人間形成に照準を合わせた学知＝スキエンティアと区別して、これをドクトリーナ (doctrina) と呼ぶこともできように属する。そのことによって始めて、それを学ぶ者自身が学習過程を通じて精神的陶冶を体験でき、人間形成の一助となり得るのである。換言すれば、現代においてあるべき人文学は、一方で高度に専門化した知識でありつつも、単なるサイエンス (science) であってはならず、何らかの仕方で人間形成に資するラーニング (learning) という側面ももたなければならない(18)。当然のことながら、この問題は大学における教養および教育の問題に行き着く。この点をめぐっては、様々な議論が成り立ちうるが、人文学の問題と教養の問題が不可分であることは、認めなければならないであろう(19)。

それでは、新しい人文学の地平を具体的にどの方向に求めるべきか。筆者はその主要な手がかかりを、19世紀以来のフィロロギーの伝統と現代の「哲学的人間学」(die philosophische Anthropologie) のなかに求めたい。前者に関しては、ベークの「認識されたものの認識」という定式のなかに、きわめて重要なヒントが含まれており、後者に関しては、プレスナー (Helmuth Plessner, 1892-1985) やゲレン (Arnold Gehlen, 1904-76) から多くを学ぶことができるが、とりわけエルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874-1945) の「シンボルを操るもの」(animal symbolicum) という人間把握から決定的に重要な示唆を得ることができる。

というのは、人文学的な学問は、自然的現象を客観的に観察・実験・記録し、普遍的な法則へともたらそうとする自然科学と異なり、おおむね過去の人間が残した遺物、文献、作品、社会的文化的制度などを対象として、他の人間主体が過去におこなった認識・表現活動を、過去の人間の痕跡としての文化

的所産を介して、間接的に再認識しようとする活動である。自然科学や一部の社会科学が、原初的・直接的な認識としてのギグノースケイ (γίγνωσκεῖ) という性格をもっているとするれば、人間の精神活動の産物を対象とする人文知は、むしろ再認識としてのアナギグノースケイ (ἀναγίγνωσκεῖ) という特徴を有している。なぜなら、後者は通常、何らかのメディアを通じて伝達された過去の痕跡を手掛かりに、歴史の不可逆性と一回性とに規定された過去の人間の自由な精神活動の所産を、追体験的に再構成してふたたび認識へともたらそうと努めるからである。それゆえ、人文学は「認識されたものの認識」という自己再帰的な、多重的な入れ子構造をその特質とする。その際、ドロイゼンやディルタイが言うように、人文学は自然科学と違って、《説明》(Erklären)ではなく、主に《理解》(Verstehen)という認識方式に依拠する。つまり、人文知は「解釈」による「理解」という読解の技術を必要とする間接知なのである。しかし自然科学的な直接知であれ人文学的な間接知であれ、このような学知が可能となるのは、実は人間存在のロゴスの(言語=理性的)構造——「ゾーオン・ロゴン・エコノ」(ζῶον λόγον ἔχον)⁽²⁰⁾——によっている。カッシーラーはこれを「シンボルを操るもの」(animal symbolicum)として読み解いたが、人間存在のかかる言語=理性的な特質ゆえに、人間の精神活動とその所産として文化が可能となり、神話、宗教、言語、芸術、歴史、科学などの営みが成立するのである⁽²¹⁾。

もちろん、「シンボルを操るもの」と「認識されたものの認識」という、この二つの理論だけで事足れるというほど簡単な話ではないが、拙著で試みたように、まったく異質なこの二つの学説を掛け合わせると、かなり筋の通った人文学の像が浮かび上がってくるのではあるまいか。いずれにせよ、筆者が上梓した『人文学概論』は、カッシーラーの『人間—シンボルを操るもの』とベークの『解釈学と批判—古典文献学の精髓』を主軸に構想された一つの試論であり、この二つの著作から決定的な示唆を得ている。これに比して、サイドのいう「文献学への回帰」⁽²²⁾は、全体の輪郭がほぼ定まったあとで目に留まったにすぎず、彼からの影響はそれほど強くない。筆者が「文献学への回帰」を唱える場合には、第一義的にはベークのいうフィロロギーを念

頭に置いていることを申し添えておきたい。

「東洋系」と「西洋系」の別を超えて

以上、人文学について述べてみたが、これはあくまでも一洋学者の眼から見た人文学にすぎない。日本を含む東アジアの人文学の立場からは、おそらく異なった光景が見えると思う。これについては、その分野の専門家に教えていただくとして、筆者としては、最後に、わが国の人文学における「東洋系」と「西洋系」の問題について一言述べておきたい。

すでに『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学』において述べたことであるが⁽²³⁾、明治から昭和初期までのわが国の知識人たちは、実に幅広い教養を身に着けていた。彼らの多くは東洋的伝統と西洋的伝統の両方に通じ、古文や漢文を読みこなすと同時に、ヨーロッパ起源の複数の外国語に精通していた。例えば、京都帝国大学教授の原勝郎(1871-1924)は、専門は西洋近世史でありながらみずから名著『日本中世史』(1906)を著し、また日本通史の本を英語で出版している⁽²⁴⁾。また昭和初期の名著『日本文化史序説』(1931)を著した西田直二郎(1886-1964)は、ヨーロッパとくにドイツの歴史学と対決しながら独自の方法論を確立し、それをもって日本思想史の分野に記念碑を打ち立てたが、このようなことは戦後の思想史家の容易になしえないところである⁽²⁵⁾。

若いころに卡ろうじてその聲咳に接する機会があった西谷啓治(1900-90)や吉川幸次郎(1904-80)なども、西洋と東洋の思考の懸隔を乗り越えて、自由自在に語り合える共通の幅広い教養の持ち主であった⁽²⁶⁾。拙著のなかでも取り上げた、『洛中書問』における大山定一(1904-74)と吉川の翻訳をめぐるやりとりも、戦前の知識人のそうした幅の広さを例証する一例である。それとは対照的に、わが国の戦後の知識人は、一般的に、東洋系の学者は東洋のこのことのみを扱い、西洋系の学者も西洋のこのことのみを論じている。もちろん、学問がどんどん専門化してきているので、東洋と西洋の両方の知的伝統に掉さすことは限りなく難しく、また哲学・歴史学・文学の諸領域を分野横断的に学ぶことも、もはや現実的には不可能である。にもかかわらず、このようなあり方は克服されなければならない。

グローバルな時代だからというわけではないが、とくにわれわれ日本の知識人は、東洋系と西洋系の

双方に通じる努力をする必要がある。それは、わが国が東洋系と西洋系の遭遇の場として、人類の文明史上特異な位置を占めているからにほかならない。もちろん、東洋系の人には東洋の知的伝統にウェイトを置き、西洋系の人はその逆にならざるを得ないが、いずれにせよ、東洋系だから西洋のことはわからない、西洋系だから東洋のことは知らないというのでは、まったく話にならない。だが、このような一辺倒なあり方になっているところに、わが国の人文学の弱体化の大きな一因があるように思う。「弱体化」などというと、外国語を自由に操って国際的に活躍している方々からお叱りを受けるであろうが、戦前派の知識人の学識の質とわれわれのそれを比べると、あくまでも一般論ではあるが、否定しようもない劣化が見られる。個別の限定的な専門的知識においてこそ、われわれの方が優れているかもしれないが、より広範囲の学殖となると実に痩せ細ってしまっている。少なくとも筆者はそれを痛感してやまない。

それゆえ、甚野尚志先生も翻訳に尽力されたソールズベリのヨハネス (Johannes Salesberiensis, c.1120-80) の『メタロギコン』第3巻第4章における、シャルトルのベルナルドゥス (Bernardus Carnotensis, 1124/30 頃没) に関する有名な言葉をあらためて噛みしめざるを得ない。「シャルトルのベルナルドゥスは、われわれはまるで巨人の肩に座った矮人のようなものだと言っていた。すなわち、彼によれば、われわれは巨人よりも多くの、より遠くにあるものを見ることができるが、それは自分の視覚の鋭さや身体卓越性ゆえではなく、むしろ巨人の大ききゆえに高いところまで持ち上げられているからである」⁽²⁷⁾、という意味深長な比喻である。この比喻は「両義的なもので、……解釈には注意が必要である」⁽²⁸⁾ が、一般的には、「一方で、古代の学術 (巨人) を学んでこそわれわれはものを見ることができるといふ『人文主義』の精神、他方で、しかし自分たち (矮人) が古代人よりもわずかとはいえ遠くを見通しているという自負」⁽²⁹⁾ を表わしたものと解されている。

おわりに

われわれもまた「巨人の肩に座った矮人」である。その肩の上からより遠くを見渡すことができるとしても、それは先人たちの巨大な労苦とその偉業に支

えられてのことである。とりわけ人文学は、たえず過去の知的遺産へと立ち返り、それを根源的に問い質しつつ、新しい意味を見出そうと努める。人文学が温故知新の学と見なされる所以であるが、ベークのいう「認識されたものの認識」もかかる反芻的な、あるいは自己再帰的な、知の営みを言い表わしている。このように、先達の労苦に敬意を払いつつ、その知的遺産を——偉大な先達である波多野精一 (1877-1950) の言葉を用いれば——「genau und richtig, sachlich und gründlich (きちんと正確に、事柄を大切に、徹底的に)」⁽³⁰⁾ 検証し直すことによって、人文知ははじめて前進するものだとということ、このことをわれわれはしっかり肝に銘ずべきであろう。

注

- (1) 首都大学東京には「都市教養学部」と「人文科学研究科」は存在するが、いわゆる「人文学部」はもはや存在しない。
- (2) 『田中美知太郎全集』第14巻、筑摩書房、1987年、333-335頁参照。
- (3) Peter Sloterdijk, *Regeln für den Menschenpark. Ein Antwortschreiben zu Heideggers Brief über Humanismus* (Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1999; 12. Aufl., 2014), 7-17. 仲正昌樹訳『「人間園」の規則—ハイデッガーの『ヒューマニズム書簡』に対する返書』御茶の水書房、2000年、23-35頁。
- (4) 「フマニタス研究」(studia humanitatis) については、根占献一『フィレンツェ共和国のヒューマニスト』、『共和国のプラトンの世界』、『ルネサンス精神への旅』創文社、2005—2009年を参照のこと。
- (5) 西山雄二編『人文学と制度』未来社、2013年、10頁参照。ちなみに、ピーター・パーク、亀長洋子訳『ルネサンス』岩波書店、2005年では、studia humanitatis も humanities も「人文科学」と訳されているが、これだと西山氏の論点はかき消されてまったく見えない。
- (6) 例えば、シェリング、勝田守一訳『学問論』岩波文庫、1957年参照。
- (7) ヘルベルト・シュネーデルバッハ、船山俊明他訳『ドイツ哲学史 1831-1933』法政大学出版局、2009年、95頁。
- (8) エルンスト・カッシーラーに『人文科学の論理』(中村正雄訳、創文社、1975年)と題する邦訳書があるが、これは Ernst Cassirer, *Zur Logik der Kulturwissenschaften* (1942) と ders., *Naturalistische und humanistische Begründung der Kulturphilosophie* (1939) を翻訳したものであって、厳密に言えば、「人文科学」ではなく「文化科学」の論理を考究したものである。
- (9) 安酸敏眞『人文学概論—新しい人文学の地平を求めて』知泉書館、2014年、198-205頁参照。
- (10) 貝塚茂樹訳『論語 I』中公クラシックス、2002年、39頁。貝塚茂樹『孔子』岩波新書、1951年、135頁。
- (11) August Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der*

- philologischen Wissenschaften*, herausgegeben von Ernst Bratuscheck, zweite Auflage besorgt von Rudolf Klusmann (Leipzig: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1886); A・ベーク、安酸敏眞訳『解釈学と批判—古典文献学の精髓』知泉書館、2014年参照。なお、この書物からの引用はすべて旧綴りのままにしておく。
- (12) 村岡典嗣『日本思想史概説』（日本思想史研究第IV巻）創文社、1961年、8-29頁、および村岡典嗣、前田勉校訂『増補 本居宣長2』（東洋文庫748）平凡社、2006年、15-36頁参照。
- (13) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, 10; 邦訳、16頁。
- (14) エウジェニオ・ガレン、近藤恒一訳『ルネサンスの教育—人間と学芸との革新』知泉書館、2002年、42頁。
- (15) Boeckh, *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften*, 11, 18, 53; 邦訳、17, 23, 87頁。
- (16) *Ibid.*, 40; 邦訳、65頁。
- (17) つまり、ヨーロッパのフマニタスの理念は、白人の中産階級の男性が自明なモデルとなっており、女性や子どもの存在が十分に顧慮されていないとか、またこの理念自体は西洋中心主義を反映していると同時に、それを根幹から支えてきたものである、といった批判である。
- (18) 参考までに引いておけば、*Webster's Third New International Dictionary* (Springfield, Mass.: Merriam-Webster Inc., 1993) には、ここで問題としている humanities の説明として、“the branches of learning regarded as having primarily a cultural character and usu. including languages, literature, history, mathematics, and philosophy” と記されている。
- (19) 筆者は教養の問題に関しては、村上陽一郎『あらためて教養とは』新潮文庫、2009年に大きな共感を覚えている。
- (20) 「言葉をもっている生き物」の意。アリストテレス『政治学』第1巻第2章1253a9-18参照。
- (21) Ernst Cassirer, *An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture* (New Haven and London: Yale University Press, 1944); カッシーラー、宮城音弥訳『人間—シンボルを操るもの』岩波文庫、1997年参照。
- (22) エドワード・W・サイード、村山敏勝・三宅敦子訳『人文学と批評の使命—デモクラシーのために』岩波現代文庫、2013年、77頁。
- (23) 安酸敏眞『歴史と解釈学—《ベルリン精神》の系譜学』知泉書館、2012年、30頁。
- (24) Katsuro Hara, *An Introduction to the History of Japan* (New York & London: Putnam's Sons, 1920)。原勝郎の業績に関しては、『京都大学文学部五十年史』京都大学文学部、1956年、170-171頁参照。
- (25) 西田直二郎『日本文化史序説』全三巻（講談社学術文庫、1978年）の第一巻は、「第一編 文化史研究の性質および発達」と銘打たれており、具体的には、「第一講 文化史と歴史学」、「第二講 文化史研究の発達」、「第三講 日本における文化史研究の発達」から成り立っているが、そこにはドイツ歴史学との本格的対決が見られる。このような西田の文化史学の確立を考えると、大正9年（1920）10月から同11年（1922）12月までの約2ヵ年にわたるヨーロッパ留学が、いかに大きな意義を有していたかを思わざるを得ない。これについては、斉藤利彦「西田直二郎とヨーロッパ留学」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第5号（2009）、25-57頁が貴重な情報を含んでいる。さらに、京都大学文学部史学科の特長について、西田直二郎「史学科創設のころの歴史学を思う」『京都大学文学部五十年史』457-464頁が参考になる。
- (26) 西谷啓治・吉川幸次郎『新春対談 初顔合わせ』京大学生新聞第10号（1974年1月）、2-3面。西谷啓治・吉川幸次郎『この永遠なるもの』燈影社、1985年。
- (27) ソールズベリのヨハネス、甚野尚志・中澤務・F・ペレス訳「メタロギコン」3・4、『中世思想原典集成8 シャルトル学派』平凡社、2002年、730-731頁。さらに甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神—ソールズベリのジョンの思想構造—』知泉書館、2009年、25-27頁参照。
- (28) 甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神』27頁。
- (29) 岩熊幸男「総序」、『中世思想原典集成8 シャルトル学派』平凡社、2002年、20頁。
- (30) 安酸敏眞「村岡典嗣と波多野精——嚮応する二つの『学問的精神』—」『人文論集』第39号（2008）、225頁参照。